

むかしのくらし展

「コメ物語」

「受け継がれてきた営み」

会期…令和7年12月13日（土）

～令和8年3月15日（日）



展示会場の様子

世代を問わず親しまれている定番の展示会「むかしのくらし展」。令和7年度は「コメ作り」に焦点を当てた展示を開催しました。

コメは、2千年以上前から、人々の暮らしを支えた食料であると同時に、政治・経済・文化の基盤として重要な役割を果たしてきました。

本展では、そうしたコメの歴史的

な位置づけをふまえ、先人たちが工夫を重ねてきたコメ作りの歩みを、資料を通してたどりましました。踏み車（水車）や鋤、鍬、千歯抜き、唐箕、米穀商引札などの資料や道具の数々を展示するとともに、コメ作りから派生した地域の文化に関する資料も交え、コメとともに受け継がれてきた営みについて紹介しました。会場では「田植えで学校が休みになり手伝った」と懐かしむ声や、親子連れから「2千年以上前からコメ作りが続いてきたことに驚いた」との感想が寄せられ、展示を通してコメの大切さを改めて考える機会となりました。



展示会場の様子。手前に打棚、奥に唐箕・千歯抜きなどが並ぶ

六ツ門だより

わずか一筆の奇跡

— 偶然が結んだ父の青春 —

令和7年度企画展「戦後80年平和資料展—8.11久留米空襲を語りつなぐ—」では、竹村逸彦氏（故人）から寄贈された「軍国少年日記」を展示しました。13歳だった竹村少年が、戦争末期の不安と恐怖の中で記した記録には、学徒動員の工場奉仕疎開、そして久留米空襲の惨状が克明に綴られています。

企画展の広報チラシには、この日記の写真を掲載しました。すると一通の問い合わせが。“日記の一文にある『山本君』とは、もしかして父ではないか”。ご家族によれば、当時お父様は久留米で暮らし、明善中学に在学していたとのことでした。

ほどなく弟さんが展示室を訪ねてくださいました。閉館間際、「まだ大丈夫ですか」と静かに入って来られ、展示された日記に深く目を落とされた姿に、もしかして？と、声をかけると、「間違いありません。父です」と力強く頷かれ「幼い頃から父が語ってくれた戦争の

記憶。ここに書かれていることと、一つひとつ重なります」と嬉しそうに語られました。

竹村少年が仲間の名を記した、その小さな一筆が、80年の時を越えて、ある家族の心に眠っていた記憶を呼び覚ましたのです。

資料が語り継ぐのは、過去の出来事だけではなく、失われかけたつながり、人の思いまでも甦らせる。そんな奇跡の瞬間に立ち会えたこと、スタッフ一同胸が熱くなりました。今回この資料が新たな出会いを繋いだこと。スタッフ一同驚き、そしてこうした貴重な資料が多くの方々に語り継がれていくことの素晴らしさを実感した出来事でした。

